

尊厳、権利 大切にしているか 久保厚子・全国をつなぐ育成会連合会会長

相模原殺傷事件を起こした植松聖死刑囚の裁判の判決では、津久井やまゆり園での不適切な支援の実態に言及し、県の検証でも虐待の疑いが強い身体拘束が行われていたことが明らかになった。暴力や身体拘束を正当化する職場環境が、どのような影響を植松死刑囚に与えたのかは分からない。園内の雰囲気や障害のある人への支援のあり方が、ゆがんだ思想の形成に影響を及ぼしたのではないかと感じている。

入所施設の運営に長年関わっているが、施設では虐待までいかなくても不適切な対応は、常に起こりうる。例えば食事の時にみそ汁、ごはんを全部混ぜて食べさせるのは職員がやっけてしまいがちな行為だ。忙しい中、職員は仕事が早く済むようにと考えてしまうが、それは人が食事する仕方ではない。「自分が同じことをされたらどうか」という視点に立ち、職員同士が注意し合うことを根付かせなければならない。不適切な段階で止めないと、虐待にエスカレートすることになる。

重い障害がある人のケアには工夫を重ねる必要がある。知的障害と自閉症を併せ持つ人の中には、自分の体をたたいたり、食べられない物を口に入れたりするなどの「行動障害」がある人もいる。

行動障害のある人を「安全のため」と言って車いすに拘束したり、居室に外側から鍵をかけて隔離したりしている施設は残念ながら少なくない。障害者虐待防止法では「正当な理由なく障害者の身体を拘束すること」は身体的虐待にあたり、重大な人権侵害にあたることを認識しなくてはならない。

行動障害の背景には理由がある。障害特性のため自分の意思を伝えることが苦手で、感覚過敏がある人もいる。この人は何が好きで、どんな刺激が嫌いかを調べるアセスメントをしながら、予測を立て、支援の仕方を変えていくことが、入所施設の専門職には求められる。親も「安全第一」を望んでいても、拘束してほしいとは思っていない。

親が望むのは、我が子が安心して暮らせるような、差別や虐待がない施設だ。親は誰しも、本当はずっと家で子どもをみていきたいと思っている。しかし、介護に限界を感じ、仕方なく子どもを預けている人がほとんどだ。他に行く場所がないことも多く、施設に対して声を上げにくい。親が意見を言えるような風通しのよい雰囲気作りも求められる。

入所施設の職員はその人の人生そのものを預かるようなもの。親や周りの人も支援の方法に行き詰まっている人をプロの職員集団が預かり、24時間一緒にいながら問題行動の理由を見つけて、それを取り除き、地域で暮らせるように生活を整え、送り出すのが入所施設の役割だろう。障害が重い人でも地域で暮らす方が、暮らしに彩りができ、人生に幅ができる。

障害者の人としての尊厳や権利擁護を大切にしているか。多くの支援を必要とする人を受け止める体制ができているか。不適切な支援を正当化していないか。事件の教訓を生かすためにも、障害者を支援するすべての事業者や職員は改めて自らを振り返ってほしい。

■人物略歴

久保厚子（くぼ・あつこ）氏

1951年滋賀県生まれ。知的障害がある長男の誕生を契機に親の会の活動に関わる。社会福祉法人 しが夢翔会理事長。入所施設などを運営。